

女子教育に関する一つの考察（第七報）

——江戸時代における女子教育——

岡 ヤ ス 子

（家庭科教育研究室）

An Inquiry into the Women's Education (7th report)

—The Women's Education in Edo Era—

Yasuko OKA

1. は じ め に

商品経済が漸次発展し、女性も社会的経済活動に参加する状態を見た室町期庶民の女子教育に関しては、第六報で報告した。室町時代以後幾多の変遷を経て、政権が徳川氏の手に移り、1603年家康が江戸に幕府を開いてより江戸時代を迎え、封建性の確立とともに、女性の地位の低下を認めざるを得なかった。その要因は何かを教育面から考察すると同時に当時の世相を背景にした女子教育のあり方を考えたい。

家康は「武を以て天下を取るべし、武を以て天下を治むべからず」とし、さらに永年の戦乱に鑑みて、人心安定の基は文教にあると考え、自ら朱子学者藤原惺窩を招いて学び、1607年惺窩の門人林羅山を政府の要職につけるとともに、儒学特に儒学各派の中でも最も教育体系の整備されていた朱子学を中心とした学問の振興をはかり、遂にこれが官学化したのである。

家永三郎氏も「日本文化史」の中で「封建社会の人間関係を正当化するイデオロギーとして、この時代の思想界に大きな地位を占めたのが、儒教特に朱子学の道徳であった」と述べておられるが、国民の僅か7%程度の武士に、90%を占める農工商三民を支配させる幕藩体制の社会機構に正当性をもたせるためには、儒教の五倫五常の倫理は不可欠のものであった。また、江戸幕府の絶対性を主張するため、禁中法度¹⁾、公家法度²⁾、武家諸法度³⁾、旗本法度⁴⁾、僧侶に関する法度⁵⁾、農民町人に対する御触書などの法令を設けて、凡ての人々の身分の固定化をはかり、或は階層間の移動を禁じ、結婚も法によって干渉するなど生活のあらゆる面に法の適用を行った。東照宮御遺訓の一説に「祖宗の法にしたがひば、あやまちなし」とあるが、代々の将軍は家康の意を受け継ぎ、さらに、諸大名例えば、会津藩主保科正之、岡山藩主池田光政、水戸藩主徳川光圀などの名君の藩治に共通した点は、幕府の

1) 禁中法度 1615年など。

2) 公家法度 1613, 1615, 1714年など。

3) 武家諸法度 1615, 1629, 1635, 1666, 1685年など。

4) 旗本法度 1632年など。

5) 僧侶に関する法度 1615年など。

文教政策と同じく儒学の強化主義を採用し、藩閥・郷学の中心を儒教としたことである。

儒教は本来中国において家族関係を整えるという、家族道徳から発したもので、これに古代中国の封建社会制度と秩序が反映している結果、貴と賤、尊と卑、長と幼などの秩序の維持がその根本原理であった。

かように儒教を強化した結果、大陸思想の特徴が江戸時代の思想の基調となり、わが国の家庭および社会の生活さらに、教育面に大きな影響を及ぼしたと考えられる。すなわち家庭生活においては、家制度のもと長男子単独相続による家長の絶対的権威および家族の服従と犠牲、同一家族間でも男女、長幼に尊卑あることを立前とし、社会的には、武士における主従の関係、庶民間の本家と別家、商家の主人と雇人、農村の地主と小作人、都市の家主と借家人などの身分差別を強固にした。

東照宮御消息⁹⁾に「惣領より二男の威勢強きは、家の乱の元に候事、云々」とみえ、室鳩巢の五倫名義には「人に上下の分なければ、人道も立たず、故に君臣の倫を定むるなり」また、「夫婦は和らぎ睦じき中に、男女の差別あるを本意とすべし」「男は外をおさめ、(略)女は表向きの事をいろはず」さらに、長幼有序の項に「先に生ずるを長とし、後生るを幼とす。兄弟といふも同事なるべし(略)是によって、長幼の倫を定めて(略)譬ば寵愛の子たりとも、同腹の兄をさしおきて家督を伝へからず、何ほどの才智ある弟にても、兄に先だつ事あるべからず」と、述べている。貝原益軒の初学訓卷之二には「夫婦は別を道とす。別とは貴賤のわかちありて、混乱せざる也(略)婦人は多くは愚なり」という。

さらに、近松の浄瑠璃「山崎与次兵衛^{ねびき}寿の門松」中之巻に「侍の子は侍の親が育てて武士の道を教ゆるゆえに武士と成り、町人の子は町人の親が育て、商売の道を教ゆるゆえに商人となる。侍は利徳を捨てて名を求め、町人は名を捨てて利徳を取り、金銀をためて子孫にのこす。是が道と申すもの」とある。

以上のことから、江戸時代においては身分の上下、長幼、男女の間には厳とした差別があり、女性の

地位は封建性の確立とともに低下せざるを得なかったと考えられる。また、社会の階層により、身分的立場によって、その生活目標も異なっていたと考えられる。一方経済面をみると永年の米遣い経済から殊に元禄以後は貨幣経済へと移行して、商業の発展は一段とその度を加えたため、士農工商と身分的に上位におかれた士も功をたて増禄の機会がなくなった上に、経済上の変革も加わって生活面にとまどいを味わった反面、豪商と謂われた奈良屋茂左衛門、紀国屋文左衛門、三井高利などをはじめ富をなした町人が多く、一般庶民の生活も安定度をまし、長い間貴族、僧侶、武士に片寄っていた文化に対する庶民の関心の高まりがみられた。また、益軒の家道訓卷之三に「人の書をからば、わが書をさし置て、まづ人の書を専一に見て、早返すべし、(略)人の書をからば、損汚すべからず」と述べているが、慶長年間、家康の援助などもあり、印刷技術が発展し、世の太平と相俟って書籍の出版が増加したことは、教育の普及を促進し、各階層の特質ある文化の隆盛を助長したといえる。

当時の諺に「一に百姓、二に侍、三に乞食、四に町人」といわれ、初学訓卷之四には「農は国の本なり、農は田をつくる民なり、是人をやしなふものなれば四民の本也」とは述べているが、落穂集では「郷村百姓共をば死なさぬように、生きぬようにと合点致し、收納申付る様」とある。また、本多正信の著といわれる本佐録には「一年の入用作食を積らせて、其余りを年貢に取るべし。百姓は財を余らぬやうに、不足なきやうに治ること道なり」と説明している。町人囊(西川如見著)には「いにしへは百姓より町人下座なりといへども、いつ頃よりか、天下金銀づかひとなりて、天下の金銀財宝みな町人の方に主どれる事にて、貴人の御前へも召出さる事もあれば、いつとなく其品、百姓の上に似たり」とある。これらのことから重い納貢に苦しんだ農民文化、特に農村女子の教育の立遅れは免れ得なかったと考えられる。

二宮尊徳はその著女大学論の中で「君には君の教へあり、民には民の教へあり、君は民の教へを学ぶこと勿れ、民は君の教へを学ぶ勿れ、譬へば教訓は病に処

6) 家康公が秀忠公御台所に与えた消息。

する薬方の如し、其病に依りて施すものなればなり」と述べているが、このことから社会的階層により、男女によりまた、生活目標によって、教育内容は自ら異なっていたことが考えられる。

ここで主婦の任務について考えると、武家においては、家の名誉・家風の存続などの点では夫と共にその責務を負うため、独自の強い精神鍛練を必要としたが、直接夫の任務の代理を務める、また、協力することは許されなかった。「女は（略）奥の内のみにして、闕を出でず、つとめは只衣食をととのへなどするのみにして、外事をなさざる事に候」と、難波江で教えている。庶民階層では、武家と異なり、家業を夫と協力し、分担して行う者も多く、家職に即して渾然とした協力態を築いていく使命をもっていた。仕事面でも夫の協力者となる必要が庶民の主婦にはあったといえる。かように主婦の任務の異なることは、各々の教養のあり方にも差異があったであろうと考えられる。

佐久間象山女訓に「女のみるべきふみも、世におほく侍れど、つねにをしへぐさしるせしもの、見るにますことなし」とあるが、江戸時代の女子教育には「をしへぐさ」すなわち儒者の著述になる多くの教訓書⁷⁾および家訓が用いられたが、幕府は女大学が世に出るに及んでこの書を女子教訓の規範として、この書の普及につとめた。また、中国の女訓である女誡・烈女伝などの活用をも勧めたため、教訓書にはしばしば「是孔子の御教也」「是古き聖人の御教訓なり」と述べ、女中庸、唐錦などにも教訓の例話として中国の物語が多くみられる。石川謙氏が上代・中世の女子教育は「未だ結婚せざる青年期女子のあるべき姿を教へ授けることを主眼とした」とし、近世の女子教育については「主婦としてのあるべき姿として、実生活に対する心構えを道徳的なものに求めた」（女子用往来物分類目録）

すなわち儒教的道德教育を第一としたことを述べている。今回は江戸時代の代表的教訓書の内容をもとに、女子教育に関し、一応武家を中心に発表する。

2. 婚姻形態と教育

中世初期までの婚姻形態の殆どは通婚、招婿婚であったが、鎌倉時代に入り漸次武家を中心に嫁入婚に移行したことについては既に発表した⁸⁾。江戸時代の婚姻形態は、女大学の冒頭に「夫、女子は成長して他人の家へ行、舅姑に仕るものなれば、男子よりも親の教忽にすべからず」また、「女はわが親の家を継がず」とある。益軒の女小学には「嫁入するを帰るといふ事、古き文に見えたり。如何にして斯言ふとなれば、（略）女は親の内にのみ住み果べき者に非ず。夫の家こそ、天より備われる我家なれば、嫁入は我家に帰りたる理也（略）誰か親の内にのみ在て、人の家に行ざるはあるべからず、親の内に居侍るは、是仮のやどりと思ふべし」という。すなわち「嫁す」とは、生れ育った家庭とは別の働いて死に到るまでの家庭に帰ることを意味したといえる。女子手習状にも「第一女子は一生を親の許にてはくられず、おとなしく成ては、余所へ嫁して、往々は他人の中に住居してをくる物なれば、云々」とあり、女訓孝経では「女子は親のもとに止るは暫くの中なれば、婦道を教るを母たる者のみちといふなり」と。三浦梅園の鉄漿訓でも「女は父の家を家とせず、夫の家をわが家とさだむる故によめいりといふ。字は女の家とかき、又婦家といふ字を用ゆるなり」と述べている。仙台侯伊達吉村が姫君に与えた教誡書「あしの下根」に「女は（略）いく程もなくして、他の家にゆき、夫にしたがふものなれば、親のもとにとどまり居る事も、しばしのうちぞかし」とある。以上のことから、女子は「他家に嫁す」ことを前

7) ①おもに武家が使用した女子教訓書は、女今川、唐錦、大和俗訓、家道訓、初学訓、冥加訓、女訓孝経、女論語女大学、女中庸、女小学、女古状揃園生竹、女子手習状、女五常訓、女五倫訓、難波江、女仁義物語、鉄漿訓、女庭訓往来、佐久間象山女訓、吉田松陰女訓、熊沢蕃山女子訓、千代もとくさ、あしの下根、女誡、烈女伝など。

②おもに庶民が使用した教訓書は、家内用心集、百姓囊、町人囊、商人囊、分限玉の礎、主従日用条目、女商売往来、女文用章、庭訓往来、など

8) 岡ヤス子紀要 第四報

提とし、主婦としての徳育を第一の教育としたと考えられる。

平安時代多くの女流文学者が輩出した要因と考えられることに関しては既に報告した⁹⁾が、その一端を想起すれば、平安貴族の婚姻形態では女子が、生家に夫を迎え、生家で生活し、子供を育て、わが家の財産、家系を継承した。そのため女は「家」^{むすめ}にとって貴重な存在であり、従って幼小の頃から当時女子の必修とした和歌、習字、音楽、絵画などの学芸および徳育を積極的にすすめる、魅力ある女性に育てあげてよき婿を定める、これが一門一家の繁栄に直結したのである。「わが親の家を継がず」家の繁栄に役立つことの少なくなった封建社会において、武家でも女子に対する教育は、かつての貴族に比べ低調になったであろうことが考えられる。文武両道を修めることを理想とした武士に対し、女古状揃園生竹（高蘭山翁著）には武士の妻たり女たる者は「風俗、髪貌、立居振舞、言辞を嗜み、人柄よくあるを先とすべし」とあり、女は身だしなみ、人柄の優れているを第一としたことは、「文を学ぶ者は身を修むるためなり」（あしの下根）とあることから推測できる。

3. 徳育の内容

唐錦（成瀬維佐子著）に「聖人にあらざれば、誰か生れ乍らに道を知らん」とあり、女小学にも「家ををさむることは身をおさむるにあり、身をおさむるは心を正しくするにあり」と述べているが、多くの教訓書のしめす徳育の内容のおもなることを挙げると次の通りである。

(1) 孝について

女訓孝経に「それ孝は百行の本、万善の源にして凡ての善事皆孝なり、（略）聖人の教にも孝を第一とし給ふなり」。初学訓巻之一には「孝をもって仁を行ふの本とし、人倫の初、百行の本とす」とある。益軒の女論語では「孝とはよく父母、しうと、姑につかゆる道なり、既に嫁して後は舅姑に仕ふること第一なれば、幼よりその道を能々みちびき習わしむべし」と述べている。中江藤樹の翁問答の中には「孝徳をあきらかに

せんと思ふには、まず父母の恩徳を観念すべし」という。儒教道徳における孝は、主従関係における御恩と奉公の関係と同一根拠であると教え、当代の基本的教訓とし、これを強く奨励する意をもって孝子の表彰がしばしば行われたという。

(2) 五常五倫、四徳の教え

女仁義物語（久保氏旅友著）に「こうしのみち、じん、ぎ、れい、ち、しんの五じゃうという事は、女も其みちをききて、よろしき御事に候」「五りん五じゃうのみちをよくわきまふる人、天のめぐみにかなひ、げんせあんをんにして、ごせはかならずじゃうぶつとくだつの身となるべし」このよはゆめまぼろしのごとくなれば、のちのよをたすからんとのみ、心にねがひ、ねんぶつ申候が五じゃうをしらで、いかほどねんぶつばかり申候とも、ほとけになり申まじ」と、五常の道を行うことの大切さを教えている。上杉鷹山が孫女長姫に進ぜられた女五常訓一卷には「夫れ人としては五常の道を以て、身を修る基とはするなれば、常にも此五つのものを怠り給ふべからず」と、仁義礼智信をあげて「是を五の常とはいふなり、常とは尊きも、賤きも、老たる若きにも限らず、男女の隔てもなく、日々夜々に為という事」「子を育つるにも、専ら五常の道を守り給ふべし」と述べている。室鳩巢が將軍吉宗の命を受けて記したとする五常名義によれば「仁、人として不仁なれば、さながら木石にひとし、然らば仁は心の潤ひにして、人をめぐみ物をそこなはず、常に道理に感じては、かならず忍びあう心あるを仁といふべし。義、（略）譬ば刀に刃金のあるごとく、義は心のきれものにて、一毛も受けまじきものをばうけず、一言もいふまじきことはいはず、生べきとき生、死すべきときは死し、すべて物を決断して、すこしも筋をたがへざるを義といふべし。礼、（略）衣冠正しく威儀みださず、上を尊み下をあなどらず、人を先だて、己れを後とす、（略）何事によらず、その程にあたり、少も自由がましく、さしこえたるふるまいなきを礼といふ。智、（略）常に静なる内に根に入て、物を簡弁する心あれば物にむかふ時にあたりて、自らは非に迷わざるを智といふべし。信、（略）仁義礼智

すべて信を離れず、仁義礼智の外、信の道理とてあるにあらず、いづれも真実なるといふ事を示して信となづく(略)」と説明している。五倫名義(室鳩巢著)では「人に五倫あり」として「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」をあげ、これについて理解し易く解説している。益軒の女中庸で「婦人に婦徳、婦言、婦容、婦功の四の行跡有、第一婦徳とて、氣質をよくし、偽らず、僻まず、我儘ならず、嫉妬せず、不狐疑、万に意質好やうにたしなむ事と知るべし。第二婦言とて、言葉を慎みて、物事はしたなくいふはつたなし、話強からず、声高からぬぞよし、(略)女の言まじき事は、いかに懇人に遇ても、口より外へ出すべからず。第三婦容とて、粧容の事なり、あさごとに身を清、梳化粧し、衣着、起居、拳動神妙にするの類なり、髪容化粧衣着のやうす、身の莊、人々相応にすべし、世にもて時勢などいひて、異容なる衣裳」など好むべからずと論している。「第四に婦功とて、紡績、裁縫、洗濯の事よりはじめ、女の所業真実に勤めて懈るべからず」。細やかに教えている。この他にも五常五倫四徳の教えを述べている教訓書は多い。例えば、女実語教に「義理をかき、礼を背くは、よろづの畜類にひとし」「恩を受けて恩を忘るは、木の鳥の枝を枯すがごとし」。女大学には「縦令命を失ふとも、心は金石の如くに堅くして、義を守るべし」とある。藤原惺窩の千代もとぐさをみれば「一類なりとも、富貴なる人にたからをあたへるべからず、他人のまづしき人をめぐむを仁といふなり」と。女式目にも五倫五常の道を述べ、「此五りん五じゃうとは万物の両眼のごとくにて、此内に万の事こもるとかや申せば、人としては此道をよくまもるべき事なり」と結んでいる。さらに、女仁義物語では、五常五倫は儒道であって「高人、きにん、さぶらひ、たみ百しゃう、おとこ、をんないづれもそれぞれのくらゐ、れいぎはかわれども、おこのふどうりはへだてなし」と、人間として等しく行ふべき道と教えている。

封建社会における徳育とはいえ、現代に生きる我々に、理解できぬ内容とのみはいえない。

(3) 三従の教え

女子教訓書でさらに共通して力説している教訓は儒教主義に則った三従の教えである。千代もとぐさの中

に「夫婦、この間は天地の如し夫は女を^めあわれみ、婦は夫をたつとみて、互に怨みなきようにすべし」と述べ、初学訓巻之二では「夫は婦に礼儀正しく、婦は夫に和順なるべし」としてはいるが、あしの下根に「女に三従の道あり、いとけなくしては親にしたがひ、ひととなりては夫にしたがひ、老いて子にしたがふものなれば、わが身をたてぬ事とぞ、いにしへ聖たちの給ひ置しと承る、他の家をわが家として、夫を天にもたとひしたがひつかまつる事、女の道なり」と姫君を論している。女式目上巻にも「すべて女はつみふかく、三じうとて、をさなきときは親のもとにゐて、父母にしたがひ、としなかばになれば、えんにつきて、おとに身をまかせ、としつもりては子のためにいろいろのくふうをし、(略)その身じひしんふかくおこないただしければ、この三じうも、おのづからかなひて、すへずへまでも、その家めでたきおさまるものなり」とある。女仁義物語でも「女は三じうといふ事あり(略)これを三じうのみちとて、こうし(孔子)のおしへなり、このおしへをそむく事、人げんのみちにあらず」「しうとめは、大かたよめにくむもの也、しかしながら、女はおとにしたがふみちなれば、おやにはおろかにあたれども、まずしうとめ又はおととの心にしたがふ也」という。象山女訓にも「女はたかきもいやしきも三じうとて、人にしたがふの道三つ侍り(略)」と述べ、女大学も「夫に逆ひて、天の罰をうくべからず」と教えている。さらに教訓書をみるに、女実語経に「女は三界に家なし、夫の家を家とするなり、(略)朝には早く起て、髪を削り、舅姑につかふまつれ、専心といふは心を一筋にして、舅姑につかふまつるをいふなり。曲従といふは己が理を曲て、夫に随ひつかゆるをいふなり」という。女古状揃園生では「他家に行き、夫に従ひ、舅姑に仕る身なれば、父母の許に留る時は父母に朝夕孝行をつくすべし、夫せわしく短慮ならば、わが心正しからざると知るべし」と。江川担菴書簡には「夫を天と致し候事、誰も弁へ居候へば、天を怨み天を厭み候とて逃れ申すべき様これ無く候」と、一度嫁しては、理を曲げ不平なく従えと教えている。以上のことから女子の徳育は儒教的道徳を基盤としていることが改めて理解できる。

しかし、三従の教えは儒教を教学の中心とした江戸

時代に初まったことではなく、すでに源氏物語「藤袴の巻」に「女は三つに従ふものなれば云々」と見え、また、室町時代、一条兼良が將軍義政夫人のために書いた「小夜のねざめ」の中に「大かた女といふものは、わかきときは親にしたがひ、ひととなりてはおとこにしたがひ、老ひて子にしたがふものなれば、我身をたてぬ事とぞ申める。いかほどもやわらかになよびたるがよく侍ることにや」と、述べていることから、三従の教訓はわが国女性に対する伝統的精神教育と考えられ、この徳なくしてはよき婦でなく、貞女ではなかったのである。益軒は大和俗訓巻之四の中に、兼好法師の歌「ならひぞと思ひなしてやなぐさまむ　わが身ひとつのうきよならねば」を挙げ、耐え忍ぶことの重要性を教えている。折りたく柴の記(本居宣長著)の一説に「我物覚えしより(略)つねに思出さるる事は、男児はただ事に堪ふる事を習ふべきなりと仰せられしこと」とある。堪えることは人間として多くの場合男女共に重要なことであるが、特に家庭生活では一方的でなく、男女相方譲り合い、忍耐し合う所に人間の幸福があると考え、江戸時代においては女子により強く耐え忍ぶことを求めているところに女性の地位の低さを感じるのである。

(4) 七去の教え

女大学に「婦人に七去とて悪き事七有、(略)この七去は皆聖人の教なり」とあり、女家訓巻之中に「夫に去る七つの罪、一には、舅姑に不孝なる婦、二には、子なき婦、三には、淫乱にてみだりがはしき婦、四には、客気ふかくねたみ有婦、五には、あしきやまひある婦、六には、常にことばおほくして、人の中ごといつはりをいふ婦、七には、夫の目をくらまし、物をぬすみて外にはこび、心かだましく理にうとき婦也」「婦の夫を捨る理はひとつもあらず」と、誠に一方的である。さらに「不嫉はねたまずとよみて、客気の心なきをいふなり、ねたまなき婦には三のさいはひあり、又ねたむ心深き女には、三のわざはひ来る」など詳細に論している。江戸時代に行われた離婚は、地域により多少の差があり、また、武家と庶民の間にも違いが認められたが、一般的に離婚の権利は夫にのみあり、妻にその権利なしとすることが原則で「家風に合わず」「我等勝手につき」との離縁状一通で、具体

的理由すら示さず一方的に離縁されても如何ともし難い状態であった。ただし、この妻を去る七つの要因を挙げたのも江戸時代からではなく、古代養老令の中にも同じ内容を示している。ただ、江戸時代においては、それが現実的に行われたといえるのである。

七去についてさらに女訓書をみれば、

女訓孝経に「婦人七去^{はじめ}の首に不孝を出せり」「女子の舅姑に事や、敬は父と同じ、愛は母と同ふす」「舅姑を我親よりも重じ、敬ふこと娶たる者の孝なり」と。女大学には「嫉妬の心努て発すべからず、男淫乱なれば練むべし、怒り怨むべからず、(略)若し夫の不義過すあらば、我色を和げ、声雅かにして練むべし、(略)必ず気色を暴くし声をあららげて、夫に逆ひ叛くこと勿れ」あしの下根には「第一嫉妬のころをつつしみ給ふべし」「もろこしの法に天子は十二人、諸侯は九人、卿大夫は三人、士は二人の婦人を置とかや、これはいささかもいろをこのみ淫にひかるるにあらず、世継のおほからんためぞかし」。さらに女訓孝経をみるに「賢明なる婦人は、仮初にも嫉妬心なく、自よき姿を進て、悪姿を遠ざくることをなし」。どこまでも男性中心である。女実語教には「語多き女は品少し、遊女のへつらひ戯るがごとし、物いふときは静にいひて、唇を開あらはすべからず、悦しき事にもいたく笑はず、腹立ことにも甚しく怒べからず」と。女五常訓には「偽も誠も言葉より出づ、慎むべきは言葉なり、仮にも虚を云ふべからず(略)子を育るに、或はそら言にて威どしなやましむる事を戒むべし」とある。益軒の冥加訓に「凡男も女も子の有はづのものなれども、先祖の宿悪か生れつき虚弱なるか、養生の不慎なるかにて、子のなきものもあり、家門相続のためならば、(略)生まぬ女は、咎なけれども去といふの法あり」「妻は何の為にか持てる、子孫を嗣がん為なり」という。女大学では「夫以外の男性に近づくべからず、いかなる用ありとも若き男に文通わすべからず」といい、女家訓巻之上に「我夫一人を大切に思ひ、余の男を恋ひしたはずたとひ夫死して寡となるとも、二度外の夫にまみへざるを守節といふ也」とも教えている。室鳩巢の六諭衍義大意をみれば「いにしへより妻を去るとさるざるとに大法あり、婦人の淫乱なるか、舅姑につかへざるか、又嫉妬ふかくもの盗みな

どすれば法において去るべし。然れども其妻家なくして帰すべき所なきか、我と年ごろ父母の喪をとものにするか、又は前には貧賤にして後には富貴なれば、大なる不義の外は、法にゐて去べからず」と理の通ったことも述べている。

「妻の姦通」に関して特に武家では理由の如何をとわず、その男女を夫が討ち果たさぬを家門の恥とした。その例を近松の浄瑠璃に求め、「堀川波鼓」をみるに、因幡の国鳥取の藩士小倉彦九郎の妻お種は、夫が江戸詰めの留守中、養子又六の鼓の師匠宮地源右衛門と酒の上で不義の關係に陥いる。やがて主君のお国入りの供をして帰藩した夫は、人々から妻の不義を聞かされるが夫は妻を信じていた。しかし、妻の妹は「妻の不貞を処理し得ぬ腰抜け侍の義妹とは添えぬ」との理由で離縁されて帰り、義兄の不甲斐なさをなじる。そこで夫は妻お種を究明し、真実をたしかめた上で成敗しようとした。なお夫を愛する妻は自決して責任をとった。夫彦九郎は養子や義妹を供にして京に向い、折柄の祇園会の賑わいをよそに、女敵討として源右衛門を刺し殺したのである。この他「大経師昔暦」「鐘の権三重帷子」など女敵討と称して姦夫姦婦に留めを刺す物語は多く、これらは現実の事件に取材したものが殆どという。要するに武家における妻の不義のみは最も悪徳として極刑に課せられた。しかしこの一方的な刑に対しては反論もあったという。

(5) 他のおもなる教え

①江戸幕府も家綱の時代から財政が逼迫したが、一般武家も寛永の頃より経済的窮乏がみられ、これに拍車をかけたのは、寛永の大飢饉および明暦の大火であった。農家も重い年貢に最低生活を強いられたため、一部富家ものをぞいて儉約は上下共に必要なことで、幕府は武士および農民町人に対してもしばしば儉約令を出して奢侈行為を禁止した。このことに関する教訓書の一例を挙げれば、あしの下根に「武家にあっては、常にきしゃ風流を好まず、質素を以て本とし云々」とある。益軒の大和俗訓巻之五に「礼義をかき、仁愛をほどこさざるは、儉約にあらずして是吝嗇なり、不徳なり」同巻之六には「家業をよくつとめ、儉約にしてみだりに財をついやさざれば、永く父のゆづりをたもちて子孫に伝ふ、孝といふべし」と農商の家に教えて

いる。主従日用条目（池田義信著）では、商家に対して、「主人の式目」の条で「質素儉約を守り、美服は勿論、高価の品無用の事」「内にては儉約を守る様に見せて、外にては奢り、酒宴遊興に無益金銀を費す事有るべからず」。「女房の式目」の条には「都て女房たる身は、内を能治め、世帯の入目に費のなき様、万事儉にすべき事」と述べてあり、この他儉約については士農工商すべての人々に言葉をつくして教えている。

②象山女訓をみると「をうな子は七つもすぎなば、よろづものやわからかにたをたをし、つねのあそびにも、女のすべきわざをのみもてあつかひ、日にてらされず、あめにもぬれず、はふあしきものの見まねせず、をとこの子をあそびのあいてにせず云々」「としのほど十にもすぎなば、内にのみありて、みだりに人に見ゆべからず」「をっとの夜ふかくかへる折ふしも（略）たとへゆるしあればとて、かへりをもまたず、ふせりなどすること、ゆめゆめあるまじきことなり、おさなきよりとしおひ身終るにいたるまで、慎といふこと、しばしもわするべからず」と、女子の育てよう、女の嗜みを教えている。家道訓巻之二でも「婦女子のしばしば外に出て遊覧をこのむはいまいまし、婦女は内に居て家を治るを職とす。外に出ることしげきはよろしからず」と、主婦となっても外出は好ましくないと戒めている。

③初学訓巻之二では「父母を養ふに志を養ふと体を養ふと二つあり。志を養ふは父母の心にしたがひて、さからはず、常に父母の心を喜ばしめ、うれへ苦しみをなからしむるをいひ、体を養ふは父母の口腹身体を養ふをいひ、飲食の味よくとのへ、父母の好みたもふものをとりてすすむべし。又夏冬おりおりの身にかねる衣服をこしらへて、これをすすめ、寝所居所を安からしめ、冬は温かく夏は涼しく風寒暑湿をふせぐべし」。誠に細心の教訓をのべている。

④鉄漿訓をみると「貞女両夫に見えず」「夫におくれし妻は笄をとり、髪を切り、歯にかねをふくまず、尼となるよう仏は教へるなり」「横さまなるよしなし事どもいはむには、命をすてても、みきを守るを婦人の第一とす」と述べており、冥加訓でも「年若なる女一生後家にて暮すといふは不幸千万なれども、義理と外聞には代へざることなれば、つつしんで貞女の道を守

るべし」と、貞女の道を守るのも一つには「外聞のため」と教え、犠牲の生涯を送った婦を貞女なりとして広く表彰も行われたのである。

女五常訓（上杉鷹山著）では「夫の留守に姿飾らず、親・夫より先にいねず、不時の食を食せず」「旦には夫より先に起出で、乱髪を見せず。女の癖は多き中にも流し目立聞き、或は人の読み居る文をのぞかず(略)」といい、女仁義物語にも「女はうちをととのふるがやく也、うちをととのふるに、若き女ぼうの一つのたしなみあり、つねにやどにては、まいなひけしやうもして、つまはずれもそろへて、ばんじにつき、おっとに見かざられぬようにたしなむ事」しかし、「かりそめにもよそへ行くときは、さのみまひなひけしやうもせずして行物也」。夫のためにのみ化粧もし、衣服も整えよというのである。

⑤女大学には「凡そ婦人の心様悪しき病は、順わざること、怒ること、しとすること、人をのしること、智恵浅きとなり。此五疾は十人に七、八人は必ずあり。是婦人の男子に及ばざる所なり」と。女中庸では「女の面は菩薩にて心は夜叉のごとし」とあり、西鶴の浮世草子「世間胸算用」巻二に「変生男子の行い」とあるが、これは、女子は罪深いため性を男子に変えぬと成仏できぬため、真言秘密の加持祈禱を行うことを意味している。女性を不浄とする仏教の女性観も加わり、強く自戒・自粛を求めている。

しかし、二宮尊徳は女大学論の中で「女大学は婦女子の教訓至れり尽せり、婦道の至宝なり、しかれども、男子が婦道はかかるものと思ふはもつての外の過ちなり、男子の読むべきものにあらず」と述べ、京都の町人増穂残口も「人情無視」と儒教的道徳を批判し、愛情に基かぬ結婚の不幸の現実を指摘して、「姦通にても、真実の愛に生きるべし。男尊女卑は我国古来の思想にあらず」と大胆な意見を述べている。

冥加訓でも「姑も嫁は大切な息子にそゆるものなれば、十八、九にもなれば世帯を渡し、教えたわるべし」といい、西鶴、近松が現実^にに発生した恋愛を中心とした事件を基に書き下した浮世草子・浄瑠璃には女性の立場に同情的なものが多い。とはいえ、女性は常に身を小さくして夫や舅姑に仕え、宮寺詣でははじめ外出は殆どせず、社交も差控え、家庭外との接触機会

に恵まれぬため、現実社会の事情に疎遠となった主婦が自己の感情や意志、さらに諸々の欲求も抑圧して営んだであろう家庭生活の中では、妻のみならず、満されぬ空虚な心を抱く夫もあったと考えられる。夫はそのけ口を遊女町に求め、廊を繁栄させる一要因となったことを西鶴や近松らの作品にみることができる。

⑥胎教をとりあげた学者も多い。

女訓孝経には「古の教に、婦人懐妊すれば、寝るに^{そばだち}側ず、坐するにかた^{かたしだち}よらず、立に^{きり}跛せず、邪味を食せず、左道をふまず、割め正しからざれば食せず、席正しからざれば坐せず、目に悪き色をみず、耳に悪き声を聴ず、口に悪き言を出さず、手に悪き器を執らず、夜は正き書を読、朝に起ては立居振舞を正しくすれば、其子形容端正にして、才徳人に勝るといふ、是胎教を守る徳なり」とある。難波江にも「いにしへ、婦人子を妊みては、立居も正しく、食も物も正しからねば食はず、すべて露ほども邪なる事にふれず候へば、其生るる子かたち端正にして、才も人にまさることなり」と説いている。女家訓巻之中には「胎教とて子を孕みては、やがて母の身もちつねに正しくつつしみ、かりにも悪敷事を見ず聞かずして、胎内にあるうちより善にうつらせ、其子をみちびき教をなせる也」といいその他、あしの下根などでも胎教について教えている。

4. 徳育の指導

女子の徳育は家庭内において、体験を通しての個別教戒と教訓書の学習が主で、集団の場で行われる性格の教育ではなかった。しかし、近世における社会生活全体の組織化および、文化の発達、家庭と家庭、家庭と社会との交渉関連を繁くし、生活要素の共通性を拡大した結果、教育内容にも共通に学習すべき事項が漸次多くなり、共同学習が考えられ、それが可能な施設も提供せられる状態となったが、武家の女子教育は当代を通じて家庭中心であったと考えられる。

この点について教訓書を見る。

女訓孝経に「婦道を教るを母たる者のみちといふなり」とある。家道訓巻之一にも「子を育てるには、おごりとはしいまなるをはやくいましむべし。(略)よるずのこと質朴にすべし(略)あしきくせつきては、後にならひとなりて改めがたし」と。五倫名義の

中でも「父母たるもの子を愛するとならば、必ず教戒あるべし、愛におぼれて子を不義に陥しむるは、鳥獣の子を愛するに於て、誠の愛にあらず、子たるものは、身を慎みて、父母の志にそむかざるようにすべし」と述べている。女家訓には「いとけなき時には教へいましむる事悪しと心得、寵愛におぼれて、何事も其子の氣随にまかせて、ほしいままにふるまわせば、立居振舞などの、賤しくそだち、其心放埒になる」「子をおしへ正しくするの道、幼少と成人との差別あり、いとけなきときは、父母・めのとの心もち、身のしかたを正しくして、是を見ならはすを根本とす、云々」とあるが、その成人の教育について唐錦では「孔子ひねもす食せず、夜もすがらいねず、おひをわすれ、うれひをわすれ給ふ、聖人すらかくのごとし、いかにいはんや、それよりもしもなるともがら、つとめくるしまずして道にいたることあらんや」そのため慾を抑え、をごりをいましめるべし、と教えている。

世状騒然とした幕末、吉田松陰はその女訓の中で、「具原氏ノ書、或ハ心学者流ノ書等ヲ以テ教トス、是尤モ正シク尤モ善シト雖モ、柔順幽閑、儉素ノ教ニ傾キ、節烈果斷ノ訓ニ乏シ」「厳シク女子ヲ教戒セズ、婦道ヲ失フ時ハ、一家治ラズ」「世ニ貞烈ノ婦ノ乏シキ所以ハ父兄ノ教戒至ラザルナリ（略）女子ノ教育ハ特ニ母親ノ責任ナリ」と厳しく述べている。以上のことから、徳育の場は家庭が中心であり、その「人間形成」の容易でないことが考えられる。

5. 知育、芸能について

(1) 読書

江戸時代の支配者は「百姓、町人および女子に学問の必要なし」「女子に学問させれば女らしさを失ふ」ともいったが、女実語教では「眠を除いて読書を学べ」「学び覚て助となるは読書、絲竹、しきしまの道」さらに「品に従ひて法あり、また身に应じて程あり」と、身分社会の当時、各その分に応じた学問をすべしとしている。百姓養巻二にも百姓の学問として、「分限に应じ、人間の道を知らんと志あらば大学一冊にても不足なし、孝経一卷にても親切に学び侍らば、天地の道理をしらずといふ事なし、此外の書は百姓要用のものにあらず」「儒者や医者となるための学問をせんと

ならば、又格別の儀なるべし」と、男子について述べたものである。まして農家の女子には多くの読書は求めなかったと考えられる。象山女訓に「文はもっぱらかなたるべし」とあるが、女子については武家でも高度の学問を求めず、仮名文字の書物が読めれば可としたと考えられ、各階層を通じて女子の知育は軽視したと思われる。すなわち女性の資質の向上をはかる積極的な教育ではなかったといえる。

象山女訓ではまた、「女のみるべきふみも世におほく侍れど、つねにをしへぐさしるせしもの、見るにますことなし、（略）みだりがはしき源氏物語のたぐひは、人のこころをもうごかしやすく、かへって見る人の、あだとなることも侍るべし」。難波江でも「女は学問とても男とは大にたがひ候、たゞ四書小学など宜しくわきまへ候はば、姫かがみ、仮名烈女伝の如きふみ、よりより心をとめて見るべく候、かつ古き記録なども見やうにより、行にたよりあり候故、しかるべく候、只源語・勢語のたぐひは甚姪乱なることを教へ申候やうなる事にて、行には成りがたく候」、心定って後に見るのは風流でよいと述べている。鷹山の女五常訓にも、同様に「風雅のみにして、五常をあきらめん便には遠かるべし」という。吉田松陰も源氏物語・伊勢物語等は「俗書」とし、読むことを「深く嘆ズル所ニテ、教トスルニ足ラズ」と述べている。鎌倉時代の教訓書乳母のふみ（阿仏尼著）、室町時代に書かれた身のかたみ（一条兼良著）などでは、貴族女性に教えて「げんじの物語、よくよくごらんじて 云々」とあるが、当代においては「人の心を迷わすもの」としている。時代により文学書の受けとめ方の相違が考えられる。

しかし、文化6年（1809）式亭三馬の著した「浮世風呂」三編巻之下に「物しづかに人がらよき 婦人二人」が町の女湯に入って来て、「うつば物語を読み返さうと活字本を求めました」「あなたはやはり源氏でございますか」「賀茂翁の源氏物語新訳と本居大人の玉の小櫛をもとに書入れをいたしました」と、話し合っている。学問を好む町人がむしろ心遣いなく古典を読物としたかと考えられる。とはいえ、同書に「教養が厳密にすぎては渡世の妨げ」とも述べている。

(2) 手習い、和歌など

手習いは生活の必要上、武家、町人ともに学習すべ

しとすすめている。女手習状に「今此日出度御代に生て、物かかねば、常に不自由なるのみにあらず、人と交りて見おとされ笑はるゝ事有れば、口惜きことぞかし、されば上れきれきより、軽き下々迄、先づ手習ふ事をおしゆるはいづくも同じ事也」「亦手跡など美しく書ぬれば、親達をも人の誉るものなれば、孝行の一つなり」「筆かなわねば、心に思ふほど書れず、文章もふつつかなれば、(略)我思ひとたがふ事あれば、こころの程は通ぜず」と。その必要を述べている。

女実語教でも「幼きとき手習ふ事せざれば、年たけて悔ともかひなし、物習ふにあくこと勿れ」と、教えている。女式目下巻に「てならひは、心やすくてむづかしき物なり」「人の物をかくは、てがかくべきか、心がかくべきかといへば、こたへていわく、両方の和合にてかく也、しかれ共、まず心が第一といへり」と、心定まらねば文字は書けぬと論している。また、「商人の女房などは、第一の用にたつことなり」とも述べている。象山も女訓の中で「たとへみえよくうまれたりとも」書くことを知らなければ「たまにひかりなきたぐひなるべし」といい、また、「いやしきもの子どもさへ」心あるものは、書くわざに思いをこらす「ましてさむらひの娘なんどのふみよみ、ものかくことにうときはあるべきことにもあらず」と、ある。女古状揃園生竹には「商工の妻となりたる女は、内を治むること肝要也、物書・縫針の心がけは定たる事、間ある時は算数も覚ゆべし、(略)」と町人の妻の学ぶべきことを述べている。

和歌の学習について、象山は「うたなどもおさなきよりこころにかけざれば、にはかになりがたし」。益軒も女小学の中で「力をも入らずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の中をも和らげ、武士の心をも慰むるは歌也と、古今にはべれば、歌を教へぬるも、猛き心を和らげん為ぞかし」と、和歌の学習をすすめている。女仁義物語には「うた・連歌などをかし氣に詠じあげるなどは、女子の身に恥かはしく見ぐるし」と、戒めている。元禄時代以後芭蕉によって芸術的境地を深め、広く大衆に親しまれた俳諧、西鶴を代表とする浮世草子、近松の世話物などの小説の流行のほか、狂歌・川柳など時勢の変化の中で、町人文化の隆盛をみたが、女子の歌の学習としては伝統

的な和歌の学習が好ましいとしている。しかし、室町時代までの教訓書にみられた「今古集などよくよく学び覚へよ」とまでは述べていない。

その他、中世までの教訓書には殆ど見られなかった内容としては、先の女古状揃園生竹の商家の妻への教訓にも見られたが算術の学習が挙げられる。貨幣経済が盛んになった江戸時代としては当然のことといえる。藤原惺窩は武士に対して「聖人、賢人みなたからを散して道を行ふ。(略)宝をこのむ心あらば愚人と知るべし」と、述べ「銀さえあれば、何事もなる事ぞかし」(西鶴の日本永代蔵)とする町人とは異なることを述べているが、武家の主婦も家の内を治めるためには算術も必要であったと考える。そのため象山は「さんはいまの世にはいやしきわざのやうにのみおもふ人もあれど(略)いささかいやしむべき事にあらず、のちに家をもち、内のまかなひをする身なれば、さんもわりかけじゆうにして、ようたつほどにこゝろえたるよろし」と教えている。

江戸時代は、女子の知育を尊重した時代とはいいい難いが、文学の多方面にわたり、女流作家と呼ばれ、今日も名を残しているものも少しとしない。女子教育に理解ある両親をもった者、当人が学問を好み精進した結果であるが、その殆どは町人女性である。その例を挙げれば、京都の茶店の娘梶女および、養女百合女の和歌。特に百合女は優れた「みやび心」をもち、歌道のほか箏、茶の湯、活花などにも優れていたという。蓮月尼も和歌の才能を十分に伸した。池大雅の妻玉瀾夫人は百合女の娘で、大雅のよき内助者として大雅を大成させ、自らは冷泉家の門に入って和歌、柳里恭に就いて絵を習ひ、閨秀画家として名をなした。女流史論家としての荒木田麗女、賀茂真淵の門人のうち三才女と謂われた、余野子・茂子・倭文子は和歌、漢文に優れた才能を発揮した。俳人としては芭蕉の門人国女・智月尼などがある。中でも最も傑出したのは加賀の千代女である。彼女は貧しい表具師の娘として生れたが、15才でよき師、美濃の盧元坊なる俳人を得て精進し、多くの名句を残している。

(3) 女功

多くの教訓書に女功として縫う技その他の技の習得をすすめている。女実語教では「ぬい針に怠ること莫

れ、飢を忍びて績紵を習へ」『それ勤めて益あるは、績つむぎ縫針の業』生れながらに知る者なし、習ひ勤めてつつしめ。生れつき愚なりとも習はば自ら手利とならん」という。女訓孝経に「うみつむぐの道を知って、おこたらずこれをつとめ、夫舅姑などの衣装を縫ふこと。遊びたわむれ、笑ひて空しく月日を送らず、或は食料・料理の事などを心得て、潔くとのえて出す」技の習得をせよとしている。女小学には「婦功とは女の業なり、たくみな事人に勝れよと言ふにあらず、常に織縫ふ業に怠らず、客人あらば食物など潔よくして馳走するの類ひ是なり」とある。女大学では「女は（略）夜遅くいね、昼に寝ずして、家の中の事に心を用ひ、織縫績緝怠るべからず、又茶酒などを多くのむべからず」「舅姑の為に衣を縫ひ食を整へ、夫に仕へ衣を畳み、席を掃、子を育て、汚を洗ひ常に家の内に居て、猥に外へ出べからず」と教え、鉄漿訓をみても「女の徳は只学、うみつむぎ、織縫、（略）何かはこれにくはふべき」とある。女庭訓往来には「婦功とは、琴をひき、ものを書、絵をかき、物をそめるにはたった姫におとらず、もの織事は、七夕の手にもかよひ、たち縫など、其品筆につくしがたきことに候」と述べているが、女五常訓では「縫針は人に劣りたりとも、夫の家を治める道を知りたるを大智と云ひ、裁縫或は機物小料理など才覚ありて、文ははしり書、常用手業くらからぬを小智といふ」と。女子は家を治める道を知ることが技よりまず大事としていられるが、殆どの教訓書の精神も概ねここにあると考えられる。

（4）音曲その他

女実語教に、琴をあげて「音楽をおさめ云々」といい、象山女訓にも「ことをひくあそびは、おのづから人の心をやわらげ」るため「わかきより習ひ侍るべし、ただし三味はそのさまいやしければ、ひくまじきなり」とある。城下町・大阪などの商業地域、大消費地としての江戸・京都、桐生・足利など織物生産地を中心に経済力に恵まれた地域の町人の間では、歌舞音曲・茶の湯など盛んとなり、女子の情操教育としても関心が深かったと考えられるが、女大学には「歌舞伎・小唄・浄瑠璃など淫たる事を見聴べからず」とあることから武家では、歌舞音曲などは教養上好ましくな

いとしたといえる。吉田松陰はその女訓の中で「和歌・俳諧・茶ノ湯等、遊芸ヲ以テ娛ミトスル間々是アリ」しかし皇国の武将の妻室となるべき女子は、これらの遊芸を楽しむことは余り好ましくないと教えている。しかし、茶の湯などは武士の中にも嗜むものもあった江戸時代、女子は活花などとともに習得したと考える。さらに象山は、武家の妻とならうとする者は武芸のたしなみも一通りは心得よと述べている。

5. 教育の施設

江戸時代、昌平坂学問所は幕府最高の直轄学校であり、最高学府であった。幕府はさらに直轄学校を新設し、江戸時代を通して二十校に及んだ。さらに諸藩が設立した藩校も多数存在したが、何れも特定の男子のみの学校であった。幕府や藩が直接に計画して設立し、または家老など藩の有力者が自費で設けた郷学は、士庶の子弟を教育対象としたが、これまた男子のみ入学を許可した。この郷学として有名な学校に、閑谷学校がある。300年の歴史を経て今日なお広大な建物を存し、岡山県内中、高校生をはじめ幾多の人々に教育センターとして活用されている。これは岡山藩主池田光政が寛文8年（1668）庶民の初等教育を行うため手習所を設け、ついで同10年から重臣津田永忠に命じて閑谷（現在岡山県備前市閑谷）に草葺の仮学校を建てさせ、さきの手習所をここに移した。その約30年後元禄15年、光政の特別の援助と永忠の努力によって今日見る善美を尽くした学校が完成し、岡山藩の教育道場として明治維新までつづき、今日に到っている。学術が振興した当代、多くの学者が輩出し、これらの学者が各々門戸を構え、集って来た好学の青少年に専門の教育を施したのが私塾であって、日本教育史資料には、全国の私塾数約1,500を挙げている。ここでは少数の女子も学んだことを同資料で知ることができる。広島県を例にとれば、私塾数58、うち女子も学んだとするものは16、私塾数の27.6%にあたり、ここに学ぶ女子は特別に才能のある者であったと考えられる。塾主としては武士が最多く、ついで平民、医師となっている。

既に述べた如く、経済状態の変化などにより、一般庶民自身も教育に関心を深め、主として庶民の文字学

習の要望に促されて設立した教育施設が寺子屋で、その殆どは庶民の力で設けられ、庶民の力で維持経営された。(日本教育史資料による)従ってその教育内容は読み・書き・そろばんが中心となったが、寺子屋が著しく普及してきた正徳・享保年間将軍吉宗は、政策遂行の一助とするため、寺子屋に保護、干渉を加え上記の教科内容のほか、児童に国法を初め、社会秩序、風俗矯正等についても教導するよう寺子屋師匠に指令した。また室鳩巢に命じて「六諭衍義」を平易な和文に訳させ「六諭衍義大意」(享保7年刊行)と題して、寺子屋の道德教育の教科書として頒布した。幕府の意を遵奉した寺子屋師匠、例えば吉田順庵らは、表彰を受けている。

日本教育史資料によれば、江戸府内の寺子屋数 295、江戸を除いた武蔵国内では 880を掲げ、維新前後まで開業した全国の寺子屋数15,500余を挙げている。また、広島県内の寺子屋数は 239、内女子の通学した数 140で、全体の58.5%に当たる。山口県では、総数 1,172(就学男女の不明のものを除く)うち女子の通学した数 631で全体の 53.83%となっている。しかし女古状揃園生竹には武家について「男子には師をとり、身を脩る道をならはしむるも、女としては師に学ぶもの稀なり」とあり、女大学その他にも10才を過ぎる頃から女子は人目にふれさせぬがよいとし、「すべて人の多く集る所へ40才より内は、余りに行べからず」とある。女小学には「書を見て芸を学ぶは、卑きより高きに登り、近きより遠きに至る心なり、遠き処に出立つも足もとより初まりて、年月をわたり、高き山も麓より成て、おひ登れると貫之も書ける」と、精進によって成果をあげよと励ましているが、江戸時代武家の女子教育は、家庭が中心で、新たに、女子にも教育施設として開放された寺子屋での学習は、庶民が中心であったと考えられる。山鹿素行は「素行語類」の中で「教戒は節あり、教戒は徳と才をもってす」として、年齢に応じた教戒の内容を詳細に示しており、益軒も、随年教法を唱え、反復練習の効果を説明し、読書の正確さや、内容の理解にポイントをおくべしとしていることは、注目に価すると思われる。

6. お わ り に

(1) 江戸時代の儒教思想を基盤とした封建的身分社会における女子教育は、指導階層であった武家でも女子の天分を豊かにする積極的教育は殆どみられず、儒学者の流布した教訓書を基に、服従と忍耐、犠牲的精神を身につけさせる主婦の徳育を第一とした。

(2) 女子の知育・芸能は一般に重視されず、読書も教訓書を中心とし、源氏物語、伊勢物語などは、姪乱にして人の心を惑わすものなりとしている。女功としては、実生活の必要から手習い、績、つむぎ、機織、裁ち縫う技、さらに加減乗除の計算、和歌、箏曲、茶道、華道の習得をすすめている。

(3) 寺子屋など家庭外の学習の場が女子にも開放されたことは、その施設は十分でなかったものが多かったとはいえ、注目すべきことである。寺子屋では武家の女子より庶民女子の方がより多く学んだと考えられる。

(4) 昭和5年文部省発行の尋常小学修身書巻五および、同6年発行巻六(定価何れも8銭)をみると、巻五の登場人物は、楠正成、上杉鷹山、吉田松陰とその母滝子、中江藤樹、勝安房などで、その人柄、行為について述べ、最後に「よい日本人」は、として、忠君愛国、孝行、忍耐、勤勉、儉約、報恩、礼儀の人なりと教えている。巻六では、楠正行、林子平、伊能忠敬、乃木希典などをあげて、その優れた人物に倣い、忠孝、勤勉、儉約、学問に励めと教戒している。さらに「男子の務めと女子の務め」として、男子は国家、社会、家の安全に力を尽し、家計を支え、女子は家庭の和楽、育児につとめるべきであるとしている。「教育は過去の教育を基盤とする」と、長田新博士は述べておられるが、江戸時代の儒教的教育は、昭和前期の学校教育における訓育面にも影響を及ぼしていると考えてよいであろう。

参 考 文 献

江戸時代	北島正元著
女五常訓	上杉鷹山著
大和俗訓	貝原益軒著
五常訓	同　上

家道訓	同 上	鉄漿訓	三浦梅園著
初学訓	同 上	千代もとぐさ	藤原愼窩著
女大学		女訓	佐々間象山著
女中庸	貝原益軒著	女訓	吉田松陰著
女小学	同 上	女大学論	二宮尊徳著
五常名義	室 鳩巢著	女実語教	著者不詳
五倫名義	同 上	女訓孝経	同 上
女子訓	熊沢藩山著	女子手習状	同 上
唐錦	成瀬維佐子著	女家訓	同 上
女古状揃園生竹	高蘭山翁著	主従日用条目	池田義信著
難波江	松平定信著	日本教育史資料	
女仁義物語	久保氏旅友著		

Summary

1. The women's education in Edo era which were feudal and social society based on Confucian ideas can hardly be recognized as positive education had been carried into effects to cultivate their natural endowments even of warriors who played the part of leader in this era.

Many educational books founded on Confucians' wide spread sermon such as Kō (filial piety), Go-Rin (the five cardinal articles of morality), Go-Jō (the five cardinal virtues) and San-Jū (the three submissiveness) were given for women and at the same time seven items lest women should be divorced by their husbands and necessities of saving etc., were advised to learn.

Thus it was a fundamental purpose that women as housewives ought to acquire obedience, patience and self-sacrifice through obeying these instructions.

As a conclusion, it is presumed that the status of women in Edo era was never high.

2. Intellectual trainings and accomplishments for women in this era were generally accounted little and reading also layed stress on instructive books and the Tale of Genji, the Tale of Ise were rejected as immoral ones to seduce women.

Succeed to the prior era, practicing penmanship, studying of short poem, spinning, dressmaking and arithmetic should be learned from the point of necessities for living.

It can be observed the primary aim of women's education was to control their minds.

3. Respect to the educational institutions in this era, women of warriors were educated chiefly in their houses; therefore, independent institutions such as Terakoya (a private elementary school) opened for all women can be regarded as an epochmaking event for women's education.